

九州住環境研究会では、左写真の「ハイブリッド・エコ・ハートQ」②住宅の快適指標編の他、住宅に関連する環境について、4分冊の小冊子を発行しております。住宅建築は、単に住宅を建てればよいというわけではなく、断熱性能などさまざまな数値によって性能管理が行われています。住宅の性能には、明確な基準があり、素材の採用や施工方法にも明確な根拠があります。それを項目毎にまとめたのが上記の小冊子です。これから順次、抜粋してご紹介致しますが、本冊子に興味のある方は、電話・インターネット等でお申し込み頂ければ差し上げます。

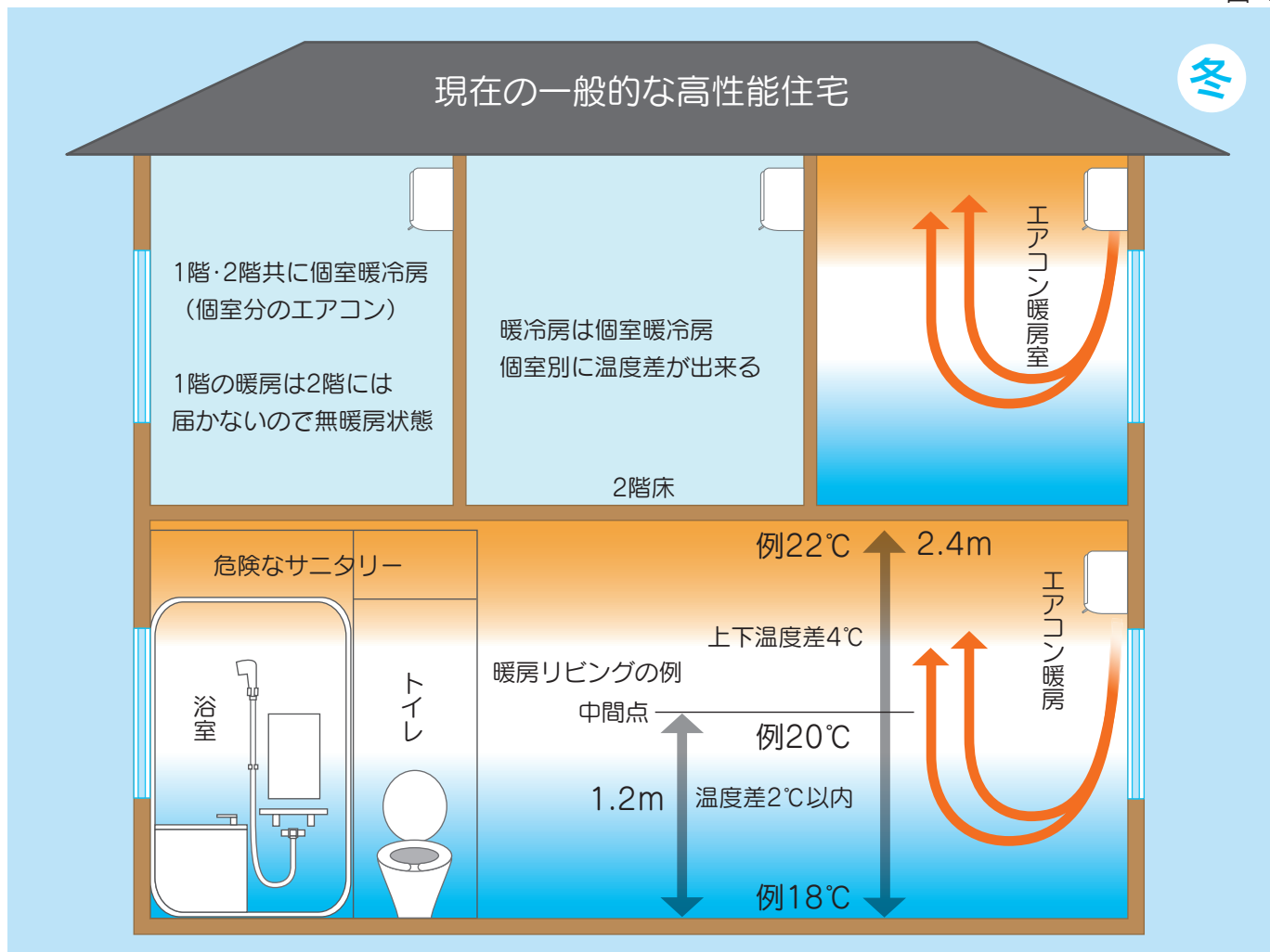
国の基準では温度差が大き過ぎ危険？

個別暖房は住宅内の温度差が大き過ぎ、健康的でない住環境に。

◎ヒートショックにならない、ぎりぎりの温度と温度差

ヒートショックが起こらない住環境を造ることが重要ですが、国土交通省では【最低室温17℃+最大上下温度差3℃~5℃】、暖房居室と非暖房居室の温度差は【5℃以内】、廊下とトイレの温度差は【3℃以内】を推奨しています。また、室温は血圧上昇が10mmHg以下であれば高齢者も安心という範囲から【廊下や浴室・トイレなど非居室で17℃】を安心レベルとしています。但し最低室温は無暖房の状態の温度です。居室間の最大温度差は3℃~5℃となっておりますが、居室内をオープンに使うなどして極力、温度差を無くすることが重要です。外観は同じく見えても住宅性能は中身が全く違うので、見かけにだまされないでください。

図-4



◎個室暖房と全館暖房はどちらが省エネルギーになるのか？

既存の省エネルギー基準で高性能住宅を謳っている住宅メーカーの場合、ほとんどが全館暖房よりも個室暖房の方が省エネルギーだと解説していますが、断熱・気密性能を高度に高めた住宅では40坪程度の住宅であれば、全館暖房でエアコン1台+補助暖冷房用のエアコン1台の2台で充分全館暖冷房が可能になります。8Pの「放射温度」の解説でも述べたように、冬期の場合、室温21℃の設定では周囲の壁・床・天井面も放射温度21~22℃と冷放射を発生させませんからエアコンの吹き出し温度も22~23度の低温暖房で済みます。下記のように吹き抜けの上下温度差2℃、左右の温度差は1℃程度の住宅を本物の高性能住宅と呼びます。

図-5

